

# 読書案内コーナー

井伏鱒二『黒い雨』（新潮文庫）



被爆者の高齢化が進み、被爆体験の風化が心配されている。若い人たちが語り部二世として被爆者の遺志を継ぐ話とかDVDに残す方法とか検討されているようだ。

実は人間は記録を文字文章で残すという方法を知っている。本を読むことがもっと普通に受け入れられれば、原爆の記憶は伝わると思う。

今回『黒い雨』を読んで、被爆者である父が話していた被爆体験の一部が甦ってきた。『黒い雨』は井伏鱒二が挑んだ記録文学と云っていい。他のつくり物語としての小説群とは一線を画している。もっとこの作品は読まれていい。

学校の授業が50分程度の細切れであり、テレビ時代の番組構成もやはり小1時間が相場だ。長くても2時間（映画・演劇）が現代人の辛抱の限界のように言われて久しい。物理的には、人間が集中できる時間は確かに2時間程度だろう。しかし、人間の持続する意志＝精神はもっと強靱だ。

途中トイレにも行くし、食事もし睡眠も必要。生活のために仕事に追われれば、途切れ途切れの読書となるが、『意志』は持続できる。

世の中にこれだけ多くの書物があり、本屋さんもそれなりに成り立っているところを見

れば、多くの需要もあるのだろう。

時間をかけての読書を、非合理だとか、一部知識人の道楽のように扱うのではなく、「本を読む」ということを、もっと人間の生活の当たり前前に据えてもいいのではないか。

確かに、原爆の悲惨を学ぶためにと、この『黒い雨』を全部読もう！などやったら、相当の時間を要するだろう。授業などで全部読む作業を組み込めば……今時の子供たちは（いやいや大人ならもっと）すぐに投げ出しちゃうかもしれない。

どうせこんな長い話は聞いてもらえない、こんな長い文章は読んでもらえない。と、早々とあきらめ過ぎていないか。まあ、教室の生徒の全員にとか、会場に集まった全員にというのは難しかろうが、推薦する側は諦めることなく、「これ、おススメだよ。」ともっと強く薦めてもいいのではないか。

井伏鱒二といえば、教科書文学史的には『山椒魚』など風刺のきいた作品をものした作家と説明されている。

実は井伏鱒二は有名な少年冒険文学『ドリトル先生航海記』の翻訳者でもある。松坂は今でこそ（実は今もそれほどの読書家ではないが）文学青年気取りでいるが、子供少年時代には読書にはほとんど縁がなかった。（文学少年ではなかった。）

仲のいい友達（それなりに読書をする家庭の子供だったのか）が読んでいた本を、仲間に入れてもらおうと、むさぼるように読んだのが『ドリトル先生シリーズ』だった。第一小学校の図書館（図書室）で友達ととっかえひっかえ借りてきて読んだものだ。

ドリトル先生シリーズの翻訳者が井伏鱒二と知っていたら、僕はもっと早い時期に『黒い雨』を読んでいたのだが……読んでいたら、この作品をもとに父の被爆体験をもう少し掘り下げて聞くことが出来たのにと、今は亡き父を思う。まあ、それでも今回縁があって、膨大な書物群の中から『黒い雨』を読むことが出来たのは、幸運だったと思う。